

北欧選手権遠征

6月3日

北欧選手権と世界選手権のトレーニングのためにフィンランドへ出発。

世界選手権1年半前になると、多くの強国が世界選手権に向けての最後の合宿を行う。直前のトレーニングキャンプに来たって、疲れをためるだけだ。日本やニュージーランドのように、遠くから来る国、資金のない国にはそんな贅沢はできない。だからこれまでもずっと直前のトレーニングキャンプで調整してきた。6月にトレーニングキャンプに来るといのは、僕のイメージの中では強国の証であった。今、そのトレーニングパターンに自分が身を置いていることには密かな興奮を感じる。

北欧選手権も憧れの舞台だ。もちろん世界選手権が、オリエンテーリングにおける世界最高の舞台だ。しかし、世界選手権に出場できるのは各国それぞれの種目において4人まで。ところが北欧選手権は6人までエントリーできる。それだけこのレースは熾烈な舞台なのだ。まだ世界が憧れの場であった時、だからこのレースがスウェーデン語で「熾烈なクロスカントリー」と呼ばれていたという記憶が残っている。その舞台へやってきたのだ。ヘルシンキ空港から、レンタカーを飛ばしてタンペレへ。

6月6日

タンペレでのトレーニングを終え、北欧選手権のためミッケリに移動。6月7日にはモデルイベントがある。タフだタフだと言われている山も、思ったほどタフではない。植生もタンペレに比べればずっときれいだ。林内の下層に広葉樹が生えていて、それが藪にとってあるのが、日本みたいだ。

フィニッシュすると、リーサがいる。76年の世界選手権で個人戦を優勝で飾り、リレーのレーン勝負で負けたあと、

「このレースは二人で走るには辛すぎる」と、妊娠の事実を告げたニュースが伝説として残っている。彼女に会ったら是非伝えなかったこと、日本には彼女にちなんで名付けられた子どもがいることを話した。彼女はフィンランド人らしく大げさに喜びもせず、ただ「その子によるしく」と答えた。

フィンランドの森は日本と同じで蚊が多い。虫除けスプレーでも蚊を排除することはできない。そうそうに退散する。車をスタートさせた直後からうしろにびったり着けてくる赤い車が、3台。ノルウェーチームの車だ。あおられた訳ではなかったが、ダートの林道から一般道に出た途端に、排気量差にまかせてスーと抜かれてしまった。1台目を運転しているのはハンネ・スタッフだった。

6月8日

北欧選手権クラシック。12.4kmで登りが500m強。ウィニング予想は88分だ。ビョルナーが「噂じゃあ、1レグに100mの登りがあるらしいぜ」と言う。「そんなの日本じゃ当たり前だぜ」。大きなミスはなかったが、トップと22分差の74位。あんなによろと登りを歩いたにしては、上出来だ。走力のある日本の若い選手なら30位だって夢じゃないだろう。

優勝はヨルゲン・ロストラップ(ノルウェー)。1999年のスコットランドで、史上最年少の世界チャンピオン(シヨート)になって以来のビッグ・タイトルだ。

6月9日

北欧選手権シヨート。そして日本への帰国日。夕方17時20分の飛行機に乗るためには、12時すぎには会場をあとにしなければならない。トップスタートが11時でシヨートだから、物律的には間に合うはずだ。だが、そのためにはほとんどトップスタートである必要があ

る。オフィシャルである小林君に、トップスタートにしてくれるように主催者に頼んでもらった。主催者の答えは「impossible」だった。そりゃそうだ。いくらなんでも、抽選に作為を加えるなんてことはできない。とりあえず、1組のスタートにエントリーする。運が良ければ12時に間に合う時刻にスタートできるだろう。

結果はトップスタートだった。監督会議に出席した小林君が、「運がいいな」と言われたそうだ。もちろん、期待した「運」なんだけれど。

フィンランドでは珍しい大雨の中を走った。そのまま車に戻って、着替えて、ヘルシンキ空港を目指す。道中軽い昼食をとって3時間ちょいで空港へ。空港でサウナを浴びて搭乗。レースの余韻を残す間もなく飛行機に乗るのも、今回の遠征にふさわしい。あくまでも、これは夏の世界選手権への1つのステップに過ぎないのだから。

6月16・17日

富士で合宿。16日の夕方からJWOC(ジュニア世界選手権)代表の李君が合流する。彼は静大の学生だが、JWOCの代表選手選考会への出場が受け入れられなかったと聞いて、始めて彼が韓国籍であることを知った。その後彼は韓国の連盟に働きかけ、そしてJWOCの主催者とも交渉し、韓国代表としてJWOCに出場できることとなった。諦めずに叩けば、扉は開かれるのだ。今から四半世紀前、イギリス留学中にオリエンテーリングを始めた杉山隆司が、日本でのオリエンテーリング活動を一度もすることなく世界選手権に日本代表選手として初出場したことが思い出される。

17日はクラシックの練習でほぼ105分のレースを走る。この距離でも最後までスピードを維持して走れた。ようやく身体がいうことをきいて動くようになった。

6月23日

ワールドゲームズの準備で秋田へ。秋田へ来るのは今年3度目だ。今回は、二回目の実行委員会を行って、役員ミーティングをし、コースチェックをし、地図の最終修正のための打ち合わせをするというヘビーなスケジュールだ。僕にとっては、コースチェックや地図修正など山での作業はむしろやりがいのある仕事だ。実行委員会というような形式的な会議の方が、むしろストレスがたまる。A P O Cの時もそうだったが、予算がタイトだと分かっている、どうしてこういう形式的な会議に限られた資源を費やすことをするのか、今もって僕には理解できない。国の財政の縮図を見るかのようだ。

24日日曜日は、結局役員ミーティングはキャンセルとなった。「じゃあ山行こう!」ということで、地元の山内さんの車で紺野とともに乳頭山から秋田駒ヶ岳にマラニックに出かける。コースタイム9時間の登山道を3時間ほどで走破。充実感はあったが、霧で眺望もなく楽しみに乏しいマラニックだったが、マラニック後の温泉は格別。

7月1日

午後から武蔵大学でWGの打ち合わせ。打ち合わせの時間まで、R嬢と奥武蔵の山をマラニック。休日に打ち合わせのために東京に来るなんて、付加価値つけなきゃやってられないよね。北欧のさわやかな夏も待ち遠しいが、汗だくになりながら走って、ふと風の涼しさに気づく日本の夏も捨て難い。こんな季節に毎日トレーニングをしなければならぬ競技者でなければ、もっと日本の夏も楽しめたのかもしれない。マラニックを終えて、村の酒屋の前で緑の山を見ながらビールを飲む幸福感も、日本ならではの。

武蔵大学で夕方紺野と打ち合わせをして、最終の1本前で静岡に帰る

7月7・8日

八ヶ岳での最終合宿。メールやミーティングで連日ワールドゲームズの運営

に意識を向けていると、自分が競技者であることを忘れてしまう。日々のトレーニングは習慣化しているからいいのだが、合宿では、選手への意識へのシフトが難しい。おまけに地図以上のやぶと暑さ。7日の練習後は露天風呂に入って、宿舎で充実した夕食。暑いとは言え、下界よりははるかに涼しい環境の中でリラックスできた。今の僕にとっては、合宿やレースは試練の場というよりもリフレッシュの場となってしまった。年長の競技者がレースでいい結果を残せる理由は案外そんなところにあるのかもしれない。

7月19日

昨年ユニバーで一緒に遠征した山口より荷物が届いていた。昨年のお礼と今年の世界選手権の激励とのことだった。絶滅寸前の動物の絵に「Life can never be recycled」と書かれたTシャツだった。最後の世界選手権を目指す僕がもうと、意味深に思える。やりなおしはきかないのだ。ベストを尽くさねばならない。

7月20日

元JOAの理事であった中島氏よりはがきが届いた。6月末に森永の副社長を退いたとの挨拶だった。丁寧にも手書きのメッセージが書かれていて「オリエンテーリングにつきましては、行き届かぬ点が多々ありましたことをお詫び申し上げます」とあった。私たちオリエンティアは森永が提供してくれたものに対して、いかばかりのものを返せたのであろうか？

遠征先発組出発。こう暑いと、たった2日でも先にフィンランドにいけるのがうらやましくなる。

8月4日

世界選手権も終わった(世界選手権については別記事をご覧ください)。夜のバンケットの時、志保子の隣にいたマリーホイヤー(デンマーク)と少し話をした。彼女はみかけよりもずっと気さくだったし、最後には「ダンスしたくない?」って誘ってくれた。日本人ならぜったいしないような目つきで時々見つめなが

らのダンスはドキドキものだった。

マリアと踊りながら、昨年のスウェーデンでのデンマークチームの合宿に参加したこと、そこで今ではチームの1走を任されているモルテンと一緒に走っていたことを思い出した。その時、僕も志保子も世界のトップチームと同じように世界を目指す選手の一員だった。そのことを思い出して、急にこの世界選手権に対する自分自身の評価が変わった。予選を通過することで、もう一度世界の舞台で日本人も戦っているという実績を残した。それだけでも予選を通過したことは評価できることなのだと思います。

8月5日

3時間ほど眠ったあと、4時のバスに乗る組に起こされ、彼らを市内まで送っていった。ターミナルから帰ったあと、ブリテンのチェックをして、少しだけ我慢して6時から走りに入った。意外に気持ちよく走れて50分も走ってしまった。世界選手権の終わった翌日にこうしてゆっくりジョギングする気分は悪くない。

ほとんどの選手は今日帰国だが、僕は田島利佳とノルウェーのトレッキングに出かけた。

8月6日

天気回復。ノルウェー人風にゆっくり起きて朝食。後から入ってきたカップルはどうやらオリエンティアらしい。息子はノルウェーのジュニアの代表にも選ばれているオリエンテーリング一家だった。その後日本の地図を持っていくと話が弾んだ。オイビンと話をする、さっと初優勝の時の年齢が出てくるところはただ者じゃない。フィンランドでの走り方はノルウェーの走り方とは違う、だからフィン5の初日では全く分からなくなって5分つぼたよというあたりも、キャリアと知識を感じさせた。

生まれたばかりの太古の大地を思わせる風景の中を歩くノルウェーのトレッキングは、世界選手権に疲れた心身をリラックスさせてくれた。たった1日だが、来た甲斐があった。